

教職員の働き方改革

なぜ働き方改革が必要なのか (働き方改革の本当の目的)

VOLUME
2

子どもたちが生きる「これからの社会」とはどんな社会か

グローバル化や情報化、技術革新等により、子どもたちが将来就くことになる職業の在り方も大きく変わると言われています。子どもたちの65%は将来、今は存在していない職業に就く(キャッシュ・デビッドソン氏・ニューヨーク市立大学という予測や、今後10〜20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い(マイケル・オズボーン氏・オックスフォード大学)などの予測があります。

また、2030年には少子高齢化の進行で、65歳以上の割合が総人口の3割を超えると言われ、2040年ごろには生産年齢人口は、2020年の8割弱、総人口の約54%となるという試算もあります。

これらの社会の変化は、多くの子どもたちのこれからの生き方に大きく影響すると考えられます。では、そんな未来を生き抜く子どもたちは、どんな力を身に付けるべきでしょうか。

「これからの社会」を生きる子どもたちに必要な力とは

これまでの社会が必要とした力は、「決められたことを正確かつ効率的に行う」ために必要な「より多くの知識を習得」し、その知識をもとに「問題を早く正確に解く力」でした。

しかし、将来の変化を予測することが困難な時代が近づいている今、子どもたちが身に付けるべき力は、どんな時代になるうとも、子どもたちが自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していく力です。これらは、「コミュニケーション力や協調性、批判的思考力、課題発見力、創造力などです。

このような力を身につけた子どもたちこそ「持続可能な社会の担い手」として、私たちが取り巻く多様な変化に、柔軟に対応していくことができます。

そのために学校は「日々の授業」をさらに充実させていかなければなりません。



教職員の働き方の実態とは

現在の牛久の先生の働き方の実態は、令和3年4月時点で時間外勤務の平均は小学校62時間、中学校83時間でした。子どもたちを4時過ぎに下校させる退勤時間が4時30分ごろです。勤務時間内の仕事の時間は30分ほどしかありません。そこで行われる仕事は、下校指導で子どもたちと一緒に途中まで引率して戻ってくる・来週や来月の行事の打ち合わせやその準備をする・宿題を見る・保護者への連絡・テストやドリルのマール付けをする・学級通信をつくる・明日の自習のプリントを作って印刷する・調査物のアンケートをまとめる・部活動の指導をするといったものです。そのため明日の「授業準備」のための時間が十分に取れない状況です。

子どもの実態も地域の実態も先生の個性もありますので、一人ひとりの先生は自分の授業を作り出していかなければなりません。そして「一人残らずすべての子どもの学びを保障」しな



ければなりません。教材の準備、発問の仕方、板書の構成、ICTの活用、地域の教材探し、授業の進め方などを研究しながら「教師が教える授業から子どもが学ぶ授業」へ「知識の伝達から子どもが自ら学び方を獲得していくような授業づくり」をしていかなければなりません。また、気になる子どもにも十分に対応する時間も必要です。これは教師でなければできない仕事です。

こうした時間を先生に保障することが、ひいては牛久の子どもたちの資質・能力の向上や、一人ひとりの将来の生活の自立や幸せづくり、そして牛久のまちづくりにもつながっていきます。

※シリーズ〈牛久の教育〉「教職員の働き方改革(全3回)」今回は広報うしく令和4年2月1日号に掲載します。